

# 国語単元学習構想・成立の条件

——大村はま国語単元学習を通して——

吉田裕久

## 一 国語単元学習の構想

戦後国語単元学習は、大村はまとともにあつたと言つても過言ではない。むろん、大村はまだけが国語単元学習を展開したわけではない。が、大村はまのこの面での尽力は比類なく突出しており、戦後国語単元学習の歩みは、とりわけその実践面は、大村はま国語単元学習の歩みと大きく重なると言つてよからう。と言うのも、大村はまは、国語教育界が単元学習にこぞつて取り組んだ昭和20年代はもちろん、学力低下などの声を受けて多くが単元学習から後退していった昭和30年代以降も一貫してその可能性を追求し、「効果的な学習指導法」として国語単元学習の実践的開拓・展開に邁進したからである。流行の中でその流れに沿うことは、多くの努力を要しない。時代が多くを助けてくれるから。しかし、逆行・逆境の中でそれに従事、努力することは、強靱な意志とそれに伴う実行力が必要となる。大村はまは、その点、教師としての責任感、企画・構想力、授業力等、いずれも人並みはずれて抜きん出た。

この、戦後中学校国語教室において一貫して独自の単元学習を

展開し続け、教育学・国語教育学者からその営みを高く評価された大村はまは、その単元学習を展開するにあたって、自らにどのような条件を課してきたのか。単元学習は、教科書を順次進めていく一般の国語科授業とは異なり、単元主題、単元構成、教材収集、指導過程、評価など、およそ授業にかかわるすべてのこと（目標・内容・方法・評価）を教師自ら立案し、構想し、実施することになる。それも大村はまの場合、年間を通して単元学習を展開したのであるから、単元の年間配置、単元間の整合性に至るまで、公言するとしないとにかかわらず、単元学習にかける深い信念のようなものが存在していたに違いない。

それでは、大村はまは、一体、自らの単元学習にどのような条件を課したのか。このことは、直接的には大村国語単元学習の成立の背景を探ることになるであろうし、また今日の優れた国語単元学習が大村はまの単元学習に多く学ぶ形で行われていることを思えば、延いては（間接的には）今後の国語単元学習構想・成立の条件（観点）を探ることにもなるであろう。その意味では、これからの国語単元学習実践のあり方も含めて、きわめて大事な示唆が得られるものと思われる。かつて大村はまは、模倣するなら

すべてを模倣してほしいと語ったことがあるし、自らの実践を一部、または表面的に取り入れた単元学習に対しては厳しく批評した。その背景には、単元学習を単に学習者に迎合した興味・関心レベル（興味本位）のものとしてではなく、単元学習こそが学習者に実の場で着実に学力をつける効果的な学習指導法と位置づける大村はまの単元学習に対する大きな期待・信念が存在していたものと思われる。この言わば「大村国語単元学習の成立を支える条件」を明らかにし、その内実を探ろうとするのが、本稿のねらいである。

## 二 大村はま国語単元学習の条件

大村はまが自らの国語単元学習の条件について直接的に言及したもののなかから、その初期（昭29）のものその後期（昭55）のものを取り上げ、それを大村国語単元学習における基礎的・基本的条件、および発展的・応用的条件と位置づけて探っていく。また、理論と実践の相即という面から、後期における実践構想例（昭61）を取り上げ、その中にそれら単元学習成立の条件が具体的にどのようなように反映しているかについても合わせて見ていくことにする。

### 1 初期の言説——「単元学習の発案のために」（昭29）

まず初期のものの中から、タイトルもそれを反映した形の「単元学習の発案のために」（中等教育技術「国語科」、昭29・10、小学館）を検討してみる。この中で、大村はまは、単元設定の観

点について、次のように述べている。

(1) 生徒の求めているものは何か。「生徒が求めている」ということは、「生徒が何を学習したいか」ということであるが、それは生徒の希望を聞くというだけではない。生徒に希望を聞くこともよいことではあるが真に自分が何を学習したいか、何を求めているかなどということを、はつきりつかみ、的確にいえるような子どもはそう多くはない。軽く生徒の希望を調べ、あまり下準備もなくたずねた結果は、思いつきになったりいわゆる興味本位になったり偏ったりしてくる。生徒が何を求めているかということ、そういう調べに重点をおくのではなく、教師が形のないものを見、声のない声を聞くという努力で、とらえなければならぬと思う。「生徒はいま、どの能力がたりないか、また、いま何を与えればぐんと伸びるか」を正しくつかみ、その求めているものを適当に与え、何か欠けていたところの満たされた感じ、一つの山を築きえた気持ちを感じたいのである。

(2) 教師の求めているもの。カリキュラムの上からぜひ扱っておきたいことがある。たとい、生徒の状態の上から、いま、そのことを扱わなければならない、あるいは、扱うのがよいということにならなくとも、この辺で取り上げて学習させておかななくては、あとの発展に不都合であるとか、他によい場がえられないので、この機会に扱いたいとか、失敗したことを一度やり直しの意味で取り入れたいとか、いろいろ、全体を見通しての教師の感じている必要な事がある。

(3) 資料が整っているか。最もたいせつな資料としての教科書に、ちょうど材料があるかどうか。もし、二年の一学期であるとするれば、二年一学期用の教科書の中にある材料を主にとりあげたい。二年の後期用の必要なことや次の学年用の教科書にはいつている材料の必要なことは、實際上、できにくい。

そのほか、いろいろの資料がまにあうかどうか。個人差に依るための、力の弱い生徒のための資料、勝れた生徒に与える資料その他特殊な生徒の学習をゆたかにするための資料、全体の練習のための資料など、用意できる見通しがついているか。必要なときは、写真その他の掲示の資料なども。

そのほか、マイクrohホンとかテープレコーダーなど使いたいとき、他教科との関係がよいかどうか。

(4) 学期始め、学期末、大きな行事などと考えあわせて時期を考える。たとえば同じく秋でも、運動会時期に「読書」とか「創作の楽しみ」というような単元は成功しにくい。

(5) 教師自身の準備の状態。これは書き上げなくとも自然に考えられる。あたりまえすぎるので普通取り上げられていないが、これも他のことと同様、改めて、大きく考えることがたいせつであると思う。ある単元の指導の準備が整って、その単元の学習指導に当たりたい気持ちをもり上げているかどうかということである。たとえばこれは特例であるが、研究会がありそれに参加して、よい意見を聞き、自分でも目を開いた点があったというようなとき、その単元に取り組めたらよいと思う。また近く、そういうよい機会を得る見込みがあれば、他の点に差しつ

かえなければその単元の学習を少し延ばすことがよいわけである。普通の場合は、準備を整え、自分で自分の気持ちを、その取りかかろうとする単元に対して盛りあげていくので、自然に気のむいてくるのを待つ意味ではない。(引用は、「大村はま国語教室」、昭57・11、筑摩書房、133〜134ページ)

以上のことを項目的に示すと、

a 学習者の求めているもの

b 教師の求めているもの

c 資料(教科書・資料・教具)

d 時期(タイミング)

e 教師自身の準備状況(気持ちの盛り上げ)

五項目が、国語単元学習の条件として提示されていることがわかる。それぞれの項目を具体的に見てみよう。

まず「学習者の求めているもの」から取り上げられているのは、戦後民主主義時代の教育環境にあつて当然とも思える。が、その学習者の把握方法が、迎合的でなく斬新である。つまり、「教師が形のないものを見、声のない声を聞く」形で学習者の実態を把握し、いわゆる学習者の興味本位に終わらない、むしろ興味・関心は教師が持たせるものという質の高い学習者観が展開されているのである。単元学習の出発にあつて大事な点であるとともに、大村はま単元学習が切り開いた固有の学習者観である。

次に、「教師の求めているもの」として、カリキュラムと学力の関連が語られている。全体とのバランスの中で部分が決定される見通しの良くきいた、周到なものとなっている。

また「教師の準備状況」も、ここで合わせて見ておくと、すでにこの時期、この「教師の準備状況」が一つの重要な検討項目として定位されていることにも目を開かれる。それも、「準備を整え、自分で自分の気持ちをも、その取りかかろうとする単元に対して盛りあげていくので、自然に気のむいてくるのを待つ意味ではない。」と言うように、教師の意欲の醸成を待つのではなく、むしろその意欲を醸成させていくという積極性に驚かされる。先の、「学習者の興味・関心は沿うものではなく、持たせていくもの」という考え方と類似の発想法である。むしろ、こうした積極的姿勢でなければ、単元学習のような自作自演で、かつ動的な学習指導法の開拓・実践は実現が困難かもしれない。

さらに資料の準備も、一般的なそれではなく、学習者の個人差にまで配慮しようとしている。これは、後に大村単元学習の基本的必須条件になるものであるが、それがすでにこの初期段階から存在していたことに改めて驚かされる。個人差に応じる——言われてみれば教育の理想としては確かにそうではあるが、実践的にこの実現がいかに困難なものであるかは、通常の教室状況と照らしてみることによって明らかである。大村の場合、この困難な観点に果敢に取り組み、同一資料を学習者全員が使うという発想から解放され、教材・資料の複数導入を始め、その時々工夫を凝らして、この実現に努めていった。教科書を中心に授業を進めてきた従来の教材（教科書）観、授業観を大きく揺さぶるものとなつた。

それに「単元展開の適切な時期」も、実践者ならではの行き届

いた配慮である。実践知——実践の積み上げの中から獲得された専門的知識——と言って良からう。

こうして見てくると、ここには、大村はま国語単元学習の初期条件が提示されているとともに、今日の単元学習状況に照らしてみても、およそ単元学習を展開するのに必要な基礎的・基本的条件が出尽くしているように思われる。

## 2 後期の言説——「国語教室の小さな知恵」（昭55）

次に、時間をかなり隔てることになるが、大村はまが退職した年（昭和55年）の8月、日本国語教育学会で講演した「国語教室の小さな知恵」から、単元学習の成立条件について述べた部分を取り上げる。大村国語単元学習の後期、完成段階における単元学習観ということになる。

まず、個人差に応じ得るかどうかということです。その対策がないというのでは単元学習になりそうもありません。それから、よく、生徒の興味と申しますが、教師の興味、つまり私自身が興味を持っていないものは単元になっていかないうな気がします。長く扱ったことがあるという文学作品であっても、今回新たな発見をしまして、私が新たな意欲を持たない限り教材にはならないと思いました。また、ひとりひとりにかけがえない位置を占めさせられない計画はやはりためであると思えます。ひとりひとりに、とにかく、そういう位置がほしいし、かけがえないひとりにみんなをおけないのでしたらその計画はだめだと思えます。次に、個々の対話の時間がなければ——

みんなと問答することではなく、一対一で話す機会が得られないという案は、単元計画にならないと思います。それから、私自身が、そのテーマに対して、十分力があるかということ。それはひとつの話題に対して、たくさんの方の考え方が自分にあるかということ。生徒が四十人おりますと、四十通りとまで行かなくても、それに近いさまざまな見方と考え方が胸に湧いているのでなければ、どんな計画にしても成功の見込みはないと思います。その次に、単元展開中にどういう言葉が出てくるのかを考えてみました。その言葉が十分でない場合、いろいろの言葉、学習の対象になるようないろいろの言葉が豊かにない場合、やはりその単元計画は捨てざるを得ません。それから、全体の流れに抑揚があつて、リズムカルでなければ成功しません。こういうものが計画できない場合は、その単元計画がよさそうでも、たとい、楽しくても、あまり子ども力にならないと思います。

もう一つ、その単元で私自身にどこか新たな成長の場面があるかということです。生徒とともに伸びると申しますが、教師もこの単元によつて成長したという実感ももてないような単元では、うまくできたようでも、生徒のほんとうの力にはなっていないような気がします。私自身もそれまでとは何か違つたものが得られるという見込み、もう一段あがれるという見込み、そういう意気込みが単元を推進させると思います。

おまけに、これはちよつとおかしいと思われるかもしれませんが、どこかにちよつと運命的なところ、つまりその人の努力

にかかわらず……というようなところがほしいと思います。全部の責任が、教師の不始末か生徒の不始末かに帰すようなのは、どうも暗くなつたりして、うまくいかないように思います。

(引用は、『大村はま国語教室④』、昭58・10、筑摩書房、350〜351ページ)

大村国語単元学習の後期、完成段階における単元学習についての言及であり、さらに質の高い単元学習の構築に向けて、レベルの高い厳しい条件が多く課せられている。こうした条件の付加、高度化が、大村国語単元学習をさらに充実・深化させるツールとして大きな働きを成していたことが理解される。以上の記述から、次の八つの条件をリストアップすることができよう。

a 個人差に応じ得るか(ひとりひとりにかけがえない位置を占めさせられるか)

b 教師が興味を持ち、新たな発見があり、意欲を持てるか。

c 生徒個々との対話の時間が得られるか。

d 教師に、その単元のテーマに対する十分な力(見方・考え方)があるか。

e 単元展開中に豊かな言葉が出てくるか。

f 全体の流れに抑揚はあるか。

g 教師自身に新たな成長の機会があるか。

h どこかにちよつと「運命的」なところはあるか。

29年の初期段階のものとは比べて、この後期段階に特に顕著なものをいくつか取り出してみよう。

まず学習者に触れた条件として、「個人差に応じ得るか(ひと

りひとりにかけてがえのない位置を占めさせられるか」「生徒個々との対話の時間が得られるか」が挙げられている。しかも、この項目が冒頭に置かれていることに改めて注目しておきたい。大村はまのこの学習者の条件にかける信念のようなものを強く感じることができるところである。ひとりとして学習に参加していない子供のいないように、そしてそのひとりひとりを生き生きとさせたなど、この「生徒ひとりひとり」は、大村国語単元学習にあつては、その初期からたえず強く意識されてきたものであつた。が、この「個人差に応じ」が、さらに発展して「ひとりひとりがかけがえない位置を占める」「個人差を生かす」まで高められることによつて、大村はま独自の条件に成長していった。

次に指導者の条件にも、教師の興味、教師の指導力という従来条件に加えて、「教師の新たな発見」「教師自身の新たな成長」が加えられた。特に後者は、「私自身にどこか新たな成長」「生徒とともに伸びる」「教師もこの単元によつて成長」「私自身もそれまでとは何か違ったものが得られる」「もう一段あがれるという見込み」などと繰り返し述べられ、単元学習が学習者だけでなく教師をも成長させる機会になることが切望されている。こうした教師の興味・発見はもちろん、成長まで単元学習の条件に含めるのは、大村はまにおいて固有である。そして、この姿勢は、実はその初期から一貫している。「共に育つ」と言つた芦田恵之助の教育理念を想起させる。そして、そうした授業の実現こそ、教師の意欲が授業に反映し、延いては学習者の学習にも好影響を及ぼすというさらに一歩踏み込んだ授業観になつていゝものと思われる。

また「単元展開中に豊かな言葉が出てくるか」は、前述したように大村国語単元学習に独自の条件である。戦後、多くの単元学習が展開されてきたし、いずれもそれなりの成果を生み出してきた。が、この「言葉」（とりわけ語彙）に着目・配慮した単元学習は、大村はまに独自である。大村はまの単元学習が国語単元学習として定位されるのも、この点にしっかりとした基盤を持つていたからである。大村はまは、国語学習において語彙にひときわ注目し、自ら週刊で発行した「国語教室通信」などの場でその学習の機会を積極的に設けていた。が、ここに単元の条件として意識的に項目化されてきたことに改めて注目しておきたい。その取り上げ方も、「この単元にはどんなことばが出てくるか」という受動的・帰納的なものではなく、むしろ「中学生にこんなことばを学習させたい」ために単元化するという能動的・演繹的な発想であり、この点にも驚嘆させられる。そして、このことは、換言すれば、ことばの学習の機会にならない単元学習は国語単元学習とは言えないという強い信念が働いていたものと思われる。それほど大村はまは、単元学習の条件として、この語彙に深いこだわりを示した。そして、その点が、他の多くの単元学習とは一線を画する独自の営みを見せたところであつた。

この語彙に関して、「授業を創る」(昭62・4、国土社)から、これと深くかかわる部分を取り上げてみよう。

単元に出てくる語彙、これがとても大切です。(中略)

語彙が豊かに出てこないような単元は、どんなにほかに魅力があつても、国語の学力から離れやすいですから、用心したほ

うがいいのです。どんなに子どもがここに喜んでいても、国語の単元は、やっていることが、みんな国語の学力につながっていないわけにはいかない。これは平凡なこと、それを忘れてはだめなことなのに、いい単元の条件になさらない方が随分あります。そして面白いということだけを追っていくというふうになつていくようです。(中略)

ある単元がよいかどうか考えるときの大切な観点として、広い範囲の語彙が豊かに出てくるか、中学生の学習に適していることば、——作文をはじめ、子どもの生活のなかでは使われていない、しかし、社会ではよく使われている、そういう言葉が中学生の勉強しなければならない、言い換えれば、中学生の学習に適している言葉であると思いますが、そういう言葉がいろいろ出てくるかどうか、ということ、資料の文章のなかだけでなく、その資料を読む心のなかに、どんな言葉が表れてくるでしょうか、また、読みながら感じたり考えたりしている心のなかに、どんな言葉が浮かび、揺れているでしょうか。また、話し合いのときなどに、どんな言葉が飛び交うと思われるでしょうか。

それらの言葉が豊かで、学習に適したものが多かったなら、その単元の学習は展開して大丈夫だと思えます。それが、同じような言葉が話し合いの際などに繰り返し出て来そうに予想されるような場合は、その単元の学習は、一応見送ったほうがよいのです、学習に入っても、意欲的な学習になることはむしろかしいと思えます。(43〜49ページ。傍線は引用者)

「語彙が豊かに出てこないような単元は、どんなにほかに魅力があつても、国語の学力から離れやすい」、「国語の単元は、国語の学力につながっていないわけにはいかない。これは平凡なこと、それを忘れてはだめなことなのに、いい単元の条件になさらない方が随分あります」と国語単元学習成立の条件を述べ、「単元がよいかどうかの観点として、広い範囲の語彙が豊かに出てくるか、中学生の学習に適していることばがいろいろ出てくるかどうか」と、その「語彙」に関する具体的な内容が述べられている。

こうして見てみると、この語彙の条件は、大村単元学習において必須の条件であるとともに、この語彙の条件を満足することこそが、これからの「国語」単元学習の構築・成立にとつて、極めて大事な条件であることが改めて認識させられる。

さらに、最後の項目hの「どこかにちよつと『運命的』なところがあるか」という項目にも注目される。この項目も、後期になつて取り上げられることが多くなつた観点である。この一見不可思議に思える項目の内実は、大村によれば、取り上げるテーマあるいは題材が、本来的に、「教師も学習者もどうすることもできない人間世界の現実が反映しているようなもの、言い換えれば、人間世界の縮図がそこに現れているような単元を」というようなことなのである。

これについても、「授業を創る」から、これに関連する部分を取り上げて、もう少し具体的に見てみる。

単元を展開したときに、どこかに……やつぱり、人生の真実が見えたりすると思うのです。努力さえすればどうということだつ

てできる、などといわれても困るのです。いかなる努力も、しなかつたと同じような結果になることが、世の中にはいくらでもあります。単元でも、一生懸命にやってもだめになつてしまふことは、いくらでもあります。それが人生の真実でしょう。

ですから私は、単元という、生活の中に足を下ろした学習には、そういう人間の悲しい真実、そういうものがどこかに息づいているような、つまり誰をも責めない、もうこれでやるよりしようがない、という、そういうものがないのではないかと思うようになりました。

どこかにそういう部面があるようにしよう、決して誰かが責められるような、我と我が身を責めなければならぬようにない——運命的というような、そういう言葉まではいませんが、いい単元の条件の中に、そういう部面を作るといふ考えも欲しいような、そのほうが人間の真実なのだから、という気がするのです。

そういう人間性の真実のようなものをもつめた考え方が、一つ条件に通つていて、子どものできないことを責めるとか——指導者のいたらないことが、ひどく自ら責められるとか、そういうことのない、子どもも教師も責められない、誰も、どつちが悪いということもない、そういうところがほしいと思います。

(同上書、56〜57ページ)

先に「どこか運命的なところ」と表現されていたものの自身が、ここにかなり具体的に示されている。つまり、「努力さえすればどういふことだつてできるなどといわれても困る」「いかなる努

力もしなかつたと同じような結果になることが、世の中にはいくらでもある」「一生懸命にやってもだめになつてしまふことは、

いくらでもある」、そして「それが人生の真実」と、人生における不可抗力のあることを取り上げ、そうした「人生の真実・人間の悲しい真実・人間の真実・人間性の真実」を反映した単元、

「決して誰かが責められるような、我と我が身を責めなければならぬようにでない」「運命的というような」単元として具体化したのである。とは言いながら、これは考えてみれば、なかなか重い条件であることがわかる。国語単元でありつつ、もはや人間単元とでも呼ぶべき教育の根源に培う究極の単元と言つてもよからう。

こうしてこの後期段階で特に注目してみた「個人差・語彙・運命的」の三条件は、おそらく大村国語単元学習における独自の条件であり、他の国語単元学習と一線を画する一段と高度の条件と言えよう。

### 3 後期の単元案——「単元 日本の少年少女の贈るインドネシア少年少女読本」(昭61)

大村国語単元学習における完成段階の単元実践案として、また単元成立の条件が明確に出されているものという視点から、第16回国語科実践研究発表会(昭和61年度)において大村はまが提示した「単元 日本の少年少女の贈るインドネシア少年少女読本 I」を取り上げることとする。本単元は実践されたものではないが、実践を想定して現職にある時と同様に構想されたものであり、それまでの実践理念を大きく反映した到達点的性格の単元として

取り上げることができよう。

単元学習の条件が、次のように記されている。関連部分を抜粋する形で引用する。

(1)興味 指導者の興味は十分です。子どものほうは、自然に興味を持つというわけにはいかないと思います。子どもの興味を大切にすることはもちろんですが、それは、子どもの興味のとについていくことではないと思います。興味を広げ、興味をもつべきものに興味をもつように指導すべきだと思います。この単元の場合などがそれに当たると思います。

(中略)

(2)少し程度の高いところがよい。適切である。

(3)個人差に依<sup>レ</sup>じよう。

(4)一対一の対話の機会、場面が相当得られると予想される。

(5)各方面のことば、程度の高いことばが、読むものにも、話し合いにも出てくると予想される。

(6)ほとんど実の場である。ことに「青少年小説本」を作る活動がグループであるが、この本は一人ではなかなか作れない。

グループ活動に必然性がある。実社会でも、このような仕事の場合、何人かのスタッフがいる。

(7)読む とういうことばの力を伸ばすことができるか。総復習として広い範囲のいろいろのことばの力を使い、伸ばす機会が含まれる。(以下、細目は項目のみ——引用者)

①本を探す。資料を探す。文献を探す。

②本の利用

③読む (読み物の種類が多い。読み方も多様。)

(8)書く (書くものの種類もたくさん。さまざまに書くことの方法を使う機会がある。)

(9)話す／聞く

①話し合い

②発表・説明

③インタビュー・質疑応答

④指導者の講話

(10)編集

以上は、主なことをあらし取り上げたのですが、これでこの単元の学習は三年生としての国語科の総復習になるかどうかを検討したわけです。そして、この単元の学習をする心を決めました。

(発表資料、9〜14ページ。傍線は引用者)

以上、出された観点を整理すると、次のようにまとめることができよう。

a 興味 (教師は十分、子どもには持たせる)

b 少し程度の高いもの、適当である。

c 個人差に依<sup>レ</sup>じ得る。

d 一対一の対話の機会・場面が得られる。

e 豊かな語彙が出てくる。

f 実の場が得られる。

g さまざまな読み物を、さまざまな読み方で読ませることができよう。

h さまざまな書き物を、さまざまな書き方で書かせることができる。

きる。

i ささまざまな聞く・話す機会を、さまざまな聞き・話し方で、聞き・話させることができる。

j 編集の機会が得られる。

先に見てきた単元学習の条件が、より実践的に提示されている。b f の条件は、これまで検討した中に直接には出てこなかったが、大村国語単元学習にあつては必須の条件である。特に f 「実の場」は、ほかならぬ大村単元学習が生み出した用語でさえある。こうして、ここには、国語単元学習を展開するにあつて、その完成段階における具体的な条件がほぼ余すことなく出尽くしているように思われる。

### 三 国語単元学習構想の条件

以上のように大村はまによる国語単元学習の条件を見てくると、これらの条件は、前述したように、直接的にはむろん大村はま国語単元学習の基本および応用的条件であるが、延いてはこれらの国語単元学習のあり得べき条件を導き出すことができるように思われる。それを、次のような項目にまとめることができよう。

A 教師―興味・実力

―成長

B 学習者―興味・関心(持つべきものを持たせる)

C 内容―単元の程度(やや高いもの)

―資料の有無

―時期

―人生の真実

D 国語―言語活動(読む・書く・話す・聞く)

―語彙

E 方法―個別指導(一人一人に應ずる、個人差を生かす)

―実の場

以上に掲げた項目をより実践的に「問い」の形で整理しなおすと、次のようになるう。

A 教師自身に関するもの

①この単元に関する興味・関心は十分か  
(長く胸に持っていたものであり、なおかつ新たな感動があるか)

②この単元を展開するにあつて、実力は十分か(たぐさんの考え方が自分にあるか)

③この単元を展開することによって、自らも成長の機会があるか。

B 学習者に関するもの

①興味・関心が得られるか。

②個と個との対話の機会は豊かにあるか

C 単元内容に関するもの

①単元の程度は、学習者の実態よりも少し高いものになつて  
いるか

②資料は十分にあるか

③時期は適切か

④「人間の真実」(人生)を感じさせられるか

D 「国語」単元学習に関するもの

①国語学力(書く・話す・読む・聞く)を着実に伸ばすことができるか

②単元に出てくる語彙は豊かか

E 単元方法(展開)に関するもの

①個人差に応じられるか(学習者一人一人にかけがえのない位置を与えられるか)

②さらに、個人差を生かすことができるか。

③「実の場」になっているか

④全体の流れに抑揚・リズムはあるか

単元学習を構想するにあたって、どんな点を心がけるべきか。

大村はまの取り上げたこれらの観点は、その肝要の部分を照射している。単元学習このよきものが、学習者の興味本位——学習者が喜び楽しむ学習——にとどまらず、さらに本物の域まで高められるためにも、こうした条件に照らして新たな問い直しが必要にならう。そして現実的には、その初期にあつては大村はまによる初期段階の条件を、円熟してくるにつれてその後期段階の条件を考慮・適応していくのがよいのかと思われる。

おわりに

時あたかも国際化、情報化、価値観多様化時代を反映して、教育界に「新しい学力観」が登場し、それに伴って国語科では単元学習が見直され、その一環として「新単元学習」が提唱された。また平成10・11年、相次いで小・中・高校の学習指導要領が改訂されて、自ら学び自ら考える「生きる力」が目指され、横断的・総合的な指導を推進するための「総合的な学習の時間」が新設された。こうして現在、単元学習的な授業展開に強力な追い風が吹いてきている。単元学習が再び脚光を浴びつつある今日、国語単元学習の備えるべき条件について、今一度見直ししておくことは意義あることである。その際、大きな参考となるのが本稿で取り上げた大村はまによる国語単元学習の条件である。

(広島大学教育学部)